

Amrubicin monotherapy for patients with extrapulmonary neuroendocrine carcinoma after platinum-based chemotherapy

二尾, 健太

<https://hdl.handle.net/2324/1831399>

出版情報 : Kyushu University, 2017, 博士 (医学) , 課程博士

バージョン :

権利関係 : Public access to the fulltext file is restricted for unavoidable reason (2)



氏 名：二 尾 健 太

論 文 名：**Amrubicin monotherapy for patients with extrapulmonary
neuroendocrine carcinoma after platinum-based chemotherapy**

（肺外神経内分泌癌に対するプラチナ系抗癌剤を含む化学療法後のアムル
ビシン療法の効果の検討）

区 分：甲

論 文 内 容 の 要 旨

肺外神経内分泌癌（以下：EPNEC）は稀な疾患であり予後不良である。臨床病理学的な類似性に基づき EPNEC に対する化学療法はしばしば小細胞肺癌の治療法が行われるが、その効果、安全性に関しては十分な検討はされておらず標準治療は未確立である。本研究では消化器に生じた EPNEC に対する 2 次治療以降に施行されたアムルビシン療法について検討した。2005 年 7 月から 2013 年 12 月の間、九州大学病院、九州がんセンター、九州病院、浜の町病院、九州医療センター、宮崎県立宮崎病院にてプラチナ系抗癌剤を含む化学療法施行後に、アムルビシン療法を受けた消化器原発の EPNEC 患者を対象に安全性と治療効果を後方視的に解析した。13 人の患者（男性 10 名、女性 3 名、年齢中央値 64 歳）を検討した。原発巣は胃 6 名、直腸 3 名、食道 2 名、肝臓 1 名、膵臓 1 名であった。全例にプラチナ系抗癌剤の使用歴があり、イリノテカンあるいはエトポシドを含む治療を既に受けた者はそれぞれ 10 人と 6 人であった。アムルビシンの初回投与量中央値は 40mg/m²/日、3 日間であり、治療サイクル数中央値は 4 サイクル（範囲 1-9）であった。客観的奏効率は 38.5%であった。無増悪生存期間中央値、全生存期間中央値はそれぞれ 107 日（範囲 22-275）、215 日（範囲 71-535）であった。主な重篤な有害事象は好中球減少（84.6%）、発熱性好中球減少症（30.8%）であった。プラチナ系抗癌剤無治療期間が 90 日以上（プラチナ感受性再発）は 90 日より短い患者（プラチナ抵抗性再発）に比べ、無増悪生存期間と全生存期間が長い傾向にあった（無増悪生存期間中央値 190 vs 63 日、全生存期間中央値 348 vs 145 日）。以上の結果、アムルビシン療法は EPNEC に対して小細胞肺癌での報告と同等の効果と安全性を示した。更に小細胞肺癌での報告と同様に、この治療は特にプラチナ感受性再発群の患者に有効である事が示唆された。

図の説明

図1

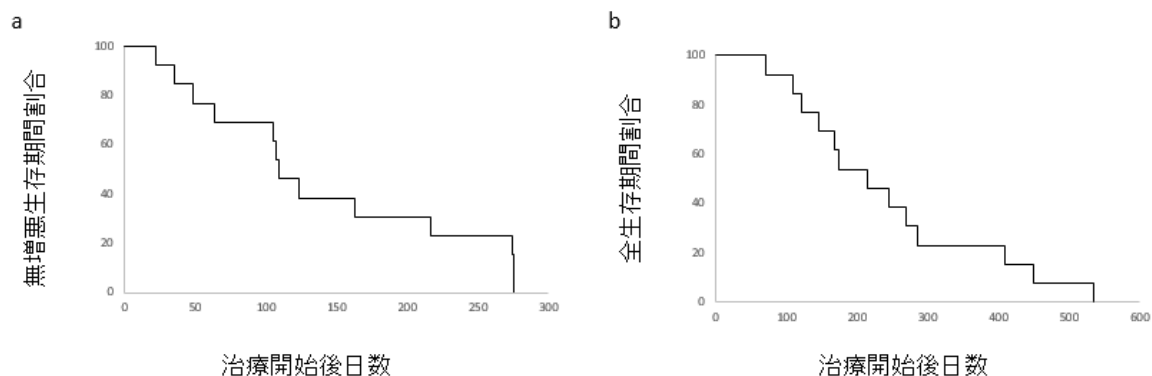


図 1 無増悪生存期間（a）と全生存期間（b）をカプランマイヤー法で解析した。中央値はそれぞれ 107 日、215 日である。

図2

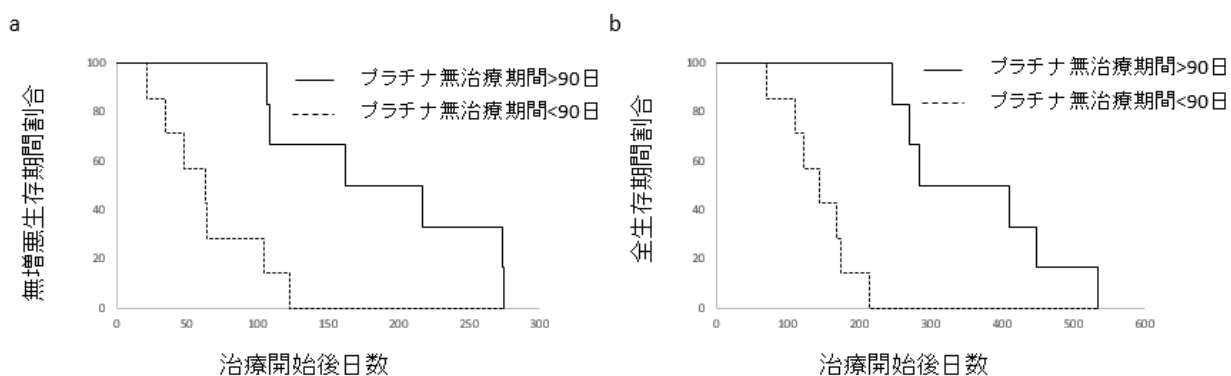


図 2 感受性群（プラチナ治療終了後期間が 90 日を超える群（7 例））か抵抗性群（90 日以下の群（6 例））における、無増悪生存期間（a）と全生存期間（b）をカプランマイヤー法で解析した。感受性群と抵抗性群の無増悪生存期間中央値はそれぞれ 190 日、63 日、全生存期間中央値はそれぞれ 347.5 日、145 日であった。